



西本願寺のご本尊。阿弥陀様の頭上に飾られているのが仏天蓋です



修復された後に発見された玉眼



修復される前の浄福寺のご本尊



お寺の本堂のお内陣は、お釈迦様が説かれた「お浄土」の姿を形にしたものです。それをもう少しコンパクトにしたのが、ご家庭のお仏壇です。お釈迦様は、そのお浄土より光（呼び声・導き・願いなど救いそのもの）が私た

はい  
浄福寺です。

浄福寺  
門徒会発行  
☎ (025) 538-2532  
FAX (025) 536-2674  
✉ jofukuji@alpha.ocn.ne.jp

先日(3月3日)長男と坊守との3人で(株)京香の工房を訪ねてまいりました。お内陣に描く予定の六鳥や天女の絵の見本を拝見し、御本尊「阿弥陀如来」の修復状況も見学させていただいたところ、そこで世紀の

修復を依頼しました(株)京香は、本願寺の国宝唐門や仁和寺、厳島神社社殿などの修復に関わってこられた実績のある業者です。

ちに届いているとおっしゃっています。ただ、その光は目に見えませんが、それを形に表したのがお内陣であり、お仏壇なのです。この度の修復に際し、ご門徒の皆様や有縁の方々のご支援により、すばらしいお内陣へと生まれかわります。ご協力して下さった皆様方に、心より御礼申し上げます。

大発見がありました。御本尊の目が「玉眼」だったのです。私は浄福寺に来て40年近く経ちますが、今まで全く気が付きませんでした。先代たちからも聞いたことがなかったので、おそらくご存知なかったのだと思います。そのらくご存知なかったのだと思います。「玉眼」とは、お顔の内側から瞳を描いた水晶のレンズをはめ込み、仏像の目をより本物らしく見せる技法です。この技法は平安時代末期より取り入れられたとされることから、浄福寺の御本尊も歴史的に非常に由緒のあるものだとわかりました。この慈愛の「玉眼」で今後も私たちを見護って下さることでしよう。

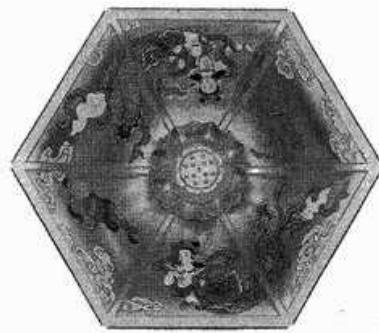
資料によると、浄福寺の御本尊は平安時代の仏師春日の作と伝わっています。「春日は中国に渡って仏像の彫刻を身につけて帰朝、自分の子との対面を機縁に親子二人で合作したのがこの御本尊だ」という物語をもっています。」との記述があります。

この御本尊は、浄福寺に後継がいなかったときに、後鳥羽院とゆかりのある会津若松の浄光寺から、二男順了(浄福寺第8代)を養子に迎えることになり、この時に春日作の木仏一体が譲られたとのことです。その後、本願寺第十二世准上人から、その木仏を御本尊としてよいとの許可を得て、それまでご安置していた「川越の名号」を秘蔵にし、代わりに木仏を御本尊としようです。

御本山本願寺にご安置されている御本尊も春日の作だと伝わっていますので、ここにも共通点があり、大変喜ばしいことです。



浄福寺のお内陣に  
「人天蓋」を設置します



この度のお内陣の修復において、二つ付け加えるものがあります。一つは「天蓋」です。語源は「天」と「蓋」に由来し、上部を覆うという意味があります。天蓋には本来「仏天蓋」と「人天蓋」とがあります。この度の修復工事では「人天蓋」を設置し、そこに天女の絵を描く予定です。御門徒の皆様にご公開する予定です。是非楽しみにして下さいます。もう一つは「六鳥」です。

お浄土のはたらきや莊嚴が説かれている「仏説阿彌陀經」には、「白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥」の六種類の鳥が出てきます。これらの鳥たちは、私たちに佛法を伝えるために仏様が姿を変えて現れ出てくださいました。昼夜合わせて六度やさしく美しい声で鳴き、聞く人を悟りへ導くと説かれています。この六鳥も本堂のお内陣の壁に描く予定です。しかもこの度は、本願寺の御影堂前卓に彫刻されている六鳥と同じデザインのものを用いました。本堂のお内陣というのは、阿彌陀様がおられるお浄土を形にしたものです。それはただデザインとして描かれているのではなく、実際に經典に書かれている光輝く美しい世界を表現したものです。本来でしたらお内陣すべてに金箔を施したいところですが、浄福寺の本堂は漆喰で空間も広く、とても現実的ではありません。そこで少しでも經典に書かれているお浄土に近づきたいと思い、天女と六鳥を描くことにいたしました。ただ、金の価格が異常に高騰する中で、去年グラム17,000円の時に契約できて良かったです。それでもお内陣の修復工事は、とても高額です。人天蓋の金額も約4,630,000円です。そこで特別に寄進していただいた方のお名前を、人天蓋に記入させていただきます。寄進額については30万円以上とさせていただきます。併せて高額な永代経を納めていただいた方のお名前も記入する予定です。浄福寺の歴史にお名前が残ります。ご希望される方や詳しい問い合わせについては浄福寺までお申し出ください。

「上越ピハラの会  
特別公開講座」のご案内

別紙チラシにありますような講演会を開催致します。

「ピハラ」とは、サンスクリット語で「安心する場所」ということで「寺院」のことです。不安が多い私たちに「心のよりどころ」となる場所という意味です。ご講師は、テレビにも出演されている小谷みどり様です。

「没イチも契機 誰かの「おせっかいおばさん」に：シニア生活文化研究所代表理事・小谷みどりさん」と紹介されました。「没イチ」とは、ご主人を亡くされていますので、こういう言い方をされたのだと思います。それが契機となった「終活」のお話です。とても興味深いですね。

会場は、板倉区にある「えしんの里記念館」です。「えしん」とは、親鸞聖人の妻「恵信尼様」のお名前のことです。少し遠いですが、恵信尼様のご廟所もありますので、参拝もかねて是非参加して下さい。また、会館にはめずらしいお土産も置いてあります。詳しいことは、チラシを御覧下さい。定員に限りがあり、浄福寺のご門徒さんだけでなく、一般の方の参加もありますので、是非参加したいと思われる方は浄福寺または国府別院(025-543-2742)に早目に申し込んで下さい。また車のない方で、乗り合いを希望される方は浄福寺までご連絡下さい。



小谷みどりさん

浄福寺のご門徒さんだけでなく、一般の方の参加もありますので、是非参加したいと思われる方は浄福寺または国府別院(025-543-2742)に早目に申し込んで下さい。また車のない方で、乗り合いを希望される方は浄福寺までご連絡下さい。

浄福寺お煤払い清掃奉仕の御礼と次回のお願

令和7年12月14日(日)のお煤払い清掃奉仕には、7区・8区のご門徒さんと常任委員が参加して下さいました。

今回は、本堂のお内陣が使用できませんでしたが、お磨きも無事行うことが出来ましたし、毎回のことですが、皆様、手際よく動いて下さいました。とても嬉しかったです。いつも皆様から助けて頂き、心より感謝し御礼申し上げます。

これまで3回参加して下さった方には、今までは印鑑ケースでしたが、今回は本願寺より取り寄せたスプーンセットの記念品をお渡ししました。また、終了後、皆様にはお弁当もお渡ししております。次回の報恩講お引き上げ清掃奉仕は、6月14日(日)に吉川区・頸城区・米山町・柏崎市・大潟区のご門徒さんにお願います。何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



「初参式」並びに「新一年生を祝う会」開催のご案内

子どもの数が少なくなりましたので、令和2年より「新一年生を祝う会」と「初参式」を合同で開催しています。



「初参式」は新たな命が誕生したことを阿弥陀様に報告し、感謝の気持ちを伝える式です。そしてその赤ちゃんが成長して一年生になったことをお祝いして「新一年生を祝う会」を開催しております。出席された方には、お祝の記念品をお渡ししています。

該当される方は、こちらでなかなか把握できなくなりまして、是非お知らせ下さい。こちらから改めてご案内させて頂きます。子ども達は私たちにとって大切な宝のような存在だと思っておりますので、浄福寺の本堂で御一緒にお祝いしたいです。

当日、参加してくれた子ども達と一緒に鐘撞堂で宝探しをします。

○「初参式」並びに「新一年生を祝う会」

5月17日(日)午後1時半～2時半

初参式は、昨年1月～12月に生まれた赤ちゃん、これまで欠席された赤ちゃんやお子さんも対象です。

参加費は共に1,000円です。どうぞ普段着でお気軽にお越し下さい。

2026 (令和8) 年度

浄福寺の定例行事

- 初お講 2月16日(月) 11時
- 春季彼岸会法要 3月20日(金・祝) 11時
- 新一年生を祝う会と初参式 5月17日(日) 13時30分
- 第1回墓地草刈り清掃(浄福寺にお墓のある方) 6月7日(日) 前日に機械刈り
- 報恩講お引き上げ清掃奉仕 6月14日(日) 9時
- 報恩講お引き上げ 6月20日(土) 22日(月)
- 門徒会世話人総会 6月23日(火) 10時30分
- 第2回墓地草刈り清掃(浄福寺にお墓のある方) 8月2日(日) 前日に機械刈り
- 町方方盆会法要 8月7日(金) 未定
- 盆参 8月13日(木) 15日(土)
- 秋季彼岸会法要 9月23日(水・祝) 11時
- 終お講 11月16日(月) 11時
- お煤払い清掃奉仕 12月13日(日) 9時
- その他の行事
  - 御本尊入仏慶讃法要 6月20日(土) 10時30分
  - お待ち受け法要並びに第29回浄福寺公開講座 10月11日(日) 10時30分～14時
  - 手仕事手づくり作品展 10月2日(金) 4日(日) 9時～16時
  - チャリティーコンサート 11月未定 14時～16時
  - 赤倉ホテル有縁講 11月前半予定

【編集後記】 今後共皆様方からの本誌へのご要望・ご意見、そしてご投稿をお気軽にどうぞお寄せ下さい。編集 寺報編集委員会